



監督＝佐々部清／出演＝寺尾聰  
／柴田恭兵／原田美枝子／吉岡  
秀隆／國村隼／鶴田真由／伊原  
剛志／樹木希林／西田敏行（東  
映配給／2003年日本映画／122  
分）

元捜査一課の敏腕刑事が、アルツハイマー病を患う「愛する妻を殺害した」と自首。殺害状況は自首により明らかとなったが、殺害から自首に至る2日間は黙否のため空白。警察用語でいう、「半落ち」状態だ。果たしてその2日間に何があったのか……？ 横山秀夫のベストセラー小説『半落ち』の映画化だが、登場人物の人間模様は実にあざやか。取り調べから起訴、そして刑事裁判の流れも違和感がなく、実にしっとりとした味に仕上がった日本映画の良心作。

## 🎬 半落ちとは

「半落ち」とは、文字通り半分落ちること。警察用語で、完全に自首（完落ち）せず、半分だけしか自首しないことをいう、ちよっと耳慣れない言葉だ。アルツハイマー病を患う妻を殺したと自首してきた梶聡一郎（寺尾聰）は、元捜査一課の敏腕警部。

幸せな家庭を持っていたはずの梶は、白血病のため愛する息子を13歳で失った悲しみによってアルツハイマー病に冒され、わが息子が死亡したことすら忘れてしまうような状態となった妻啓子（原田美枝子）から懇願され、自らの手で愛する妻の首を絞め殺害したのだった。その罪名は刑法202条の「囑託殺人罪」。

梶の取り調べにあたったのは、「落としの志木」と呼ばれる、警視に昇進したばかりの若手No.1の志木和正（柴田恭兵）。志木は、妻啓子の看病のためエリート刑事の途を捨てて、警察学校で後進の指導にあたった梶の教え子であり、

梶の崇拜者だった。志木の取り調べに対して、梶は妻の殺害状況を詳細に自白。しかし殺害から自白に至るまでの2日間の行動についてはなぜか頑なに供述を拒否。つまり「半落ち」状態となったのだ。

## 事実を隠蔽しようとする警察

元敏腕刑事による妻の囑託殺人。これは県警の大不祥事だ。この真相を明らかにしようと群がる報道陣。これをどのようにうまく処理すればいいのか……？これが県警幹部たちの本音だ。「アルツハイマー病を患った妻からの懇願による囑託殺人」「よし、この線で発表しろ！」。これで1つの処理方針が確定した。しかし空白の2日間は……？

被疑者本人がしゃべらないのなら、適当な事実を誘導して、被疑者にそれを認めさせればよい、つまり事実を捏造すればよい……。いや捏造してでも空白の2日間を埋めなければならない。これが県警幹部の一致した意見だった。そこで、梶のポケットに新宿歌舞伎町の風俗店の宣伝用のポケットティッシュが入っていたことを幸いに、「私は妻を殺害した後、あてもなく、新宿歌舞伎町のまちをさまよい歩きました」という調書が捏造された。

もちろんこんなことはあってはならないこと。梶の教えを忠実に守り、現在、若手ながら強行犯指導官という地位にある志木はこれに抵抗（反抗）したが、その結果は取り調べ担当をはずされただけだった。県警の刑事部長、業務部長、本部警務課・調査官そして本部長という県警幹部たちは、組織の維持と自らの地位の保身に躍起となるだけだった。その姿はいかにもいまましい限り。しかし実はこれがあらゆる場面における日本の組織の実態なのだ。

## 正義派検事の登場、しかし……

梶の取り調べ担当検事は、佐瀬銆男（伊原剛志）。警視庁との対立が原因で、東京地検特捜部から飛ばされてきた三席検事。彼は熱血漢で正義派だ。たちまち空白の2日間がデッチ上げであることを見抜く。もっとも、これくらいのウソは見抜かれて当然だろうが……。しかし検察は組織として動くもの。単独プレイは許されない。西田敏行扮する小国鼎検事正は、佐瀬の思いを理解しながらも、当

然ながら「組織としての検察」としての立場を守り通した。

## ちょっとヘンな弁護士が梶の弁護士

梶の刑事弁護を自ら買って出たのは、植村学弁護士（國村隼）。彼は死亡した梶啓子の姉、島村康子（樹木希林）の元に、自ら弁護したいと申し出るとともに、厚かましくも弁護士費用の負担を申し込んだ。「執行猶予になることを目指して頑張る」という売り込みだ。しかもその動機が、「40歳半ばを過ぎてなおイソ弁（居候弁護士）をやっているのが嫌になり、人権派弁護士として売り出すチャンスだ」と言うからちょっとヘンだ。

もっともこの映画の中での彼の生活ぶりや人間性を見ていると、そういう思いもわからないではない。彼は佐瀬検事と司法修習同期。しかし若くて優秀、切れ者の佐瀬と比べれば、いかにも実直だが、言いかえると愚鈍そうに見える修習生だったことがよくわかる。この植村弁護士は、弁護士面会で梶から「あなたには守りたい人がいませんか？」と問いかけられたことが、心に残る。なぜ梶はそんなことを言ったのか？ そして梶にとって守りたい人とは一体誰だったのか？ 空白の2日間の秘密が少しずつ明らかになっていく中、法廷での真相解明は果たしてどこまでできるのだろうか……？

## これまたちょっと変わった裁判官

嘱託殺人事件を裁く裁判所は3人の合議体。「主任」裁判官となり、判決を起案するのは左陪席の藤林圭吾（吉岡秀隆）裁判官。彼はアルツハイマー病の妻を殺した被告人に対してことの外、「思い入れ」がある。だから、裁判の審理方針をめぐって裁判長と衝突し、「そんな君の姿を見たら、立派な裁判官だったお父上が嘆かれるよ……」とまで言われたが……。

実は藤林裁判官も家庭では悩んでいた。彼の妻澄子（奥貫薫）は、健気に、介護を必要としている夫の父の面倒を見ているものの、澄子だって「いっそ義父が死んでくれたら……」と思ったこともある。そんな姿を日常的に見ている藤林裁判官にとって、アルツハイマー病に苦しむ愛妻から、殺して欲しいと言われ、それを実行した梶の気持はわかるものの……。

## 魅力的な美人記者、洋子

こんな男たちのドラマに、1人彩りをそえるのは、東洋新聞の記者洋子を演ずる、私の大好きな美人女優、鶴田真由。洋子は、佐瀬検事が県警に出向き、「こんなでっち上げの資料を食えるか！」と怒鳴る場面をたまたま目撃した。そこで洋子は何と佐瀬の官舎まで直接取材……。酒を飲んで荒れている佐瀬と直接向かい合い、「空白の2日間」を聞き出そうとしたのだった。しかしこれは現実にはありえない話でちょっとヤバイ行動。

その他洋子の行動はエネルギーだが、少し危険。しかしこの「足で稼いだ」取材によって東洋新聞のトップには、「県警が調書を捏造」という見出しが踊ることになった。これは何ともすごい特ダネだ。

## 人物描写の妙……

この映画の原作は、今注目のベストセラー作家、横山秀夫の最高傑作といわれる、2002年9月に出版された『半落ち』。映画を見た後、さっそく原作を購入して読んだが、映画の優位性は人物像が目に見えてわかりやすいところだ。この映画は刑事ドラマと法廷ドラマ、そして人間ドラマが共存しており、登場人物は多種多様だ。そしてこの映画ではこの多くの登場人物たちが、それぞれ自分のパーソナリティを明確に打ち出している上、演ずる役者がうまく決めているため、その人物像は1人1人すごくわかりやすい。最初から最後までほとんど動きのない「静の演技」を通した梶聡一郎を演ずる主役の寺尾聰をはじめ、役者陣は実に見事に自分の役柄を演じている。もっともこれは、原作の作りがきっちりできているからかもしれないが……。

法廷ドラマとしての迫力やサスペンス性はもう1つだが、人物像の描き方は超一流というのが実感。日本映画の良心が、ここまでの俳優を集めたのだろうと考えられる。

## さて、あなたはこの判決に納得するか？

3度ある法廷シーンのラストは判決言渡し期日。藤林裁判官は、被告人質問に

において、立ち上がり、「そんな裁きを決めるのはあなたでも、私でもない！」と質問とも絶叫ともとれる発言をした。これは刑事裁判の実務においては極めて異例のこと。そんな藤林裁判官が起案した判決主文は……？ 実務では、起案者の判断がそのまま採用されるわけではなく、3人の裁判官の合議によって最終的な判決が決まるが、さて本件の判決は……？ そしてその判決に大きな影響を与えた「空白の2日間」の評価は……？ 弁護士の私としては、この判決全文を見せてもらい、さまざまな観点から検討したいと思うが、さて皆さんはどうだろうか？

いよいよ平成16年4月から開校されるロースクール（法科大学院）での「刑事裁判」や「刑事実務」の教材として実にピッタリの映画。そういう形でも是非この映画を活用してもらいたいものだ。

## 映画ではわかりにくい「あと1年」

梶はなぜ愛する妻の後を追って自殺しなかったのか？ それには重大な秘密があった。それを解くカギは、梶が島村弁護士に問いかけた「あなたには守りたい人はいませんか？」という言葉だ。梶にとって守りたい人とは……？

横山秀夫の小説『半落ち』は、①志木和正の章、②佐瀬銈男の章、③中尾洋平の章、④植村学の章、⑤藤林圭吾の章、そして⑥古賀誠司の章の6章からなっている。この③の中尾洋平は映画では中尾洋子にアレンジされているが、ストーリーは似たようなもの。大きく違うのは映画では第6章が丸々カットされていること。だから映画では、「あと1年」の意味がわかりにくいのだが、それをじっくりと考えながら、この映画を味わうことが大切だろう。

2004(平成16)年1月13日記